

月刊JPCOAR 第5回

2022.02.21

オープン査読

佐藤翔（同志社大学）

査読が抱える問題

- 査読者確保の難航・出版遅延
- 機能不全：ちゃんと選んでいるか？
 - 質の高いものを選んでいるか
 - 同じ論文・同じ雑誌で同じ結果になるか
 - 公正に選んでいるか（バイアスの問題）
- 不正行為
 - 盗用、遅延行為
 - 詐称査読、結果の操作

査読が
不透明な
せいだ！

オープン査読

オープン査読

- 「オープンサイエンスの目的に沿って査読モデルを適応させるための、いくつかの重複した方法を表す包括的な用語」
- 120以上にもわたる定義が存在

– Ross-Hellauer (2017)

オープン査読の要素 2)

- 1) アイデンティティの公開
- 2) 査読レポートの公開
- 3) オープンな参加
- 4) オープンなやり取り
- 5) 査読前原稿の公開
- 6) 最終版へのコメント機能
- 7) オープンなプラットフォーム

オープンさの段階 3)

1) アイデンティティの透明性（互いに）

- － 全公開、査読者を著者に伏せる、両方ともに伏せる、さらに編集者にも伏せる

2) 査読者が誰とやり取りするか

- － 編集者のみ、査読者間あり、著者ともあり

3) レビュー情報の公開

- － 非公開、概要公開、レポート公開、初稿公開、やり取り公開、査読者名公開、編集者名公開

4) 出版後のコメント

- － 誰でも可、選ばれた者のみ可

アイデンティティ

- オープン査読最大の争点
- 以下の2要素を含む
 - 著者⇔査読者が互いに誰かわかる
 - 査読者名が読者に公開される
- 期待される効果
 - 不正防止
 - 査読の業績化
 - 査読者が探しやすくなる
- デメリット：査読者の不利益？

査読レポート

- オープン査読第2の争点
- アイデンティティに比べれば低反発？
- 期待される効果
 - 不正防止（不適切なレビューが公開される）
 - 詐称査読・結果操作防止
 - 査読の貢献を明確化＝業績化へ

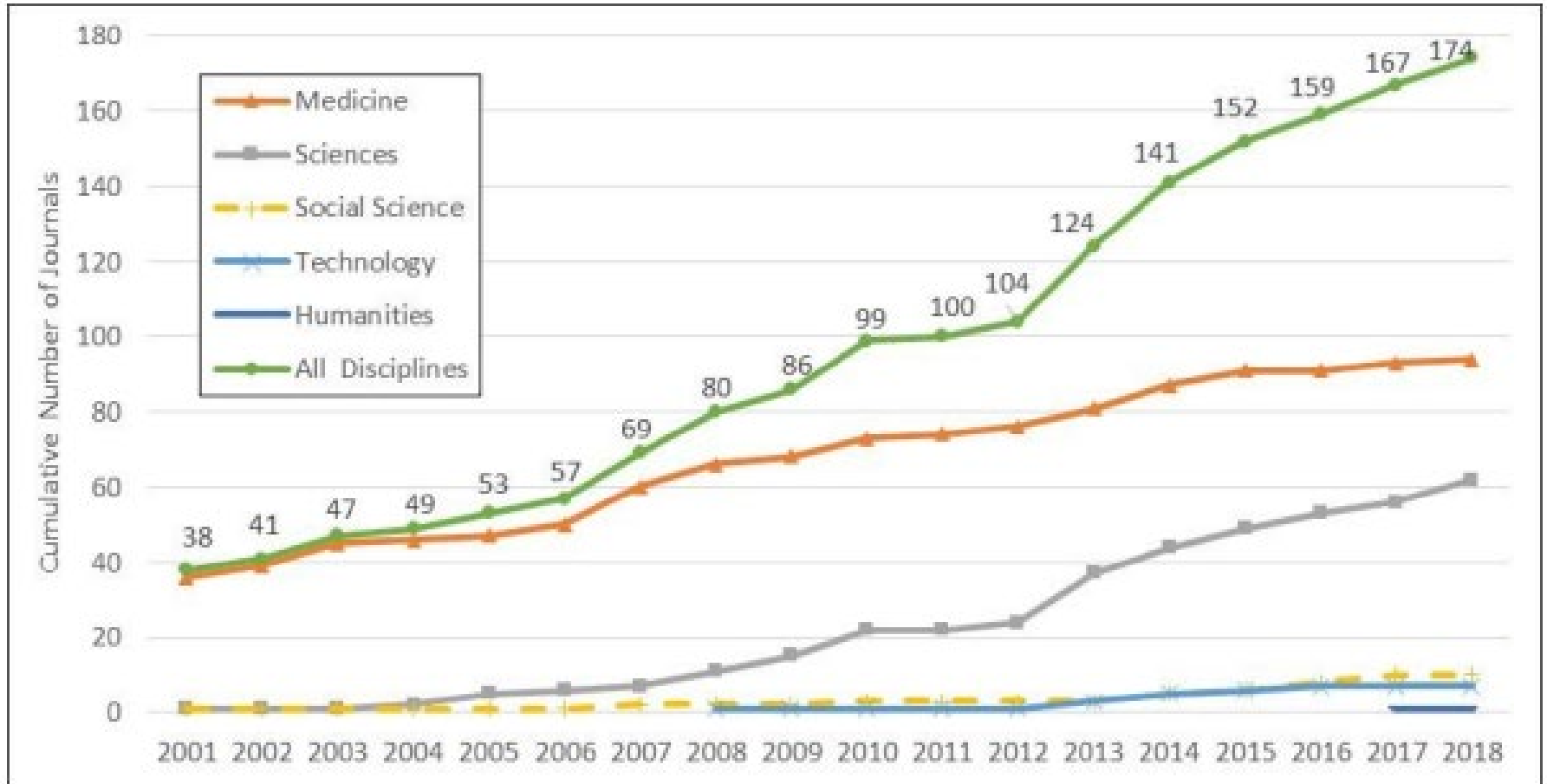


Figure 1. Growth of OPR journals by discipline groups

Wolfram, D. et al. "Open Peer Review: The Current Landscape and Emerging Models". Proceedings of the The 17th International Conference on Scientometrics & Informetrics. Rome, Italy, 2019-09-02/05.
https://trace.tennessee.edu/utk_infosciepubs/60/, (2022-02-04 accessed).

Table 4. Adoption of open identities and open reports

<i>Open identities</i> Open reports		<i>Anonymous</i>	<i>Optional</i>	<i>Mandated</i>	<i>Total</i>
None	Cases (Example)	—	—	64 (<i>Frontiers in Big Data</i>)	64
Optional	Cases (Example)	—	3 (<i>PeerJ</i>)	—	3
Mandated	Cases (Example)	1 (<i>Ledger</i>)	29 (<i>eLife</i>)	77 (<i>BMC Medicine</i>)	107
Total		1	32	141	174

Wolfram, D. et al. "Open Peer Review: The Current Landscape and Emerging Models". Proceedings of the The 17th International Conference on Scientometrics & Informetrics. Rome, Italy, 2019-09-02/05.
https://trace.tennessee.edu/utk_infosciopubs/60/, (2022-02-04 accessed).

オープン査読
で問題は
解決するか？

査読者確保の難航・出版遅延

- 業績化でみんな査読を引き受ける？
 - 現状では可能性にとどまる
 - むしろ引き受け手が減るかも？
- オープンなやり取り：長期化させるかも
- オープンな参加：調整なしでは人は来ない

ちゃんと選んでいるか？

- レポート公開で査読の質・公正性向上？
 - 特に質の向上は見られないとする研究も
- バイアスのある査読は可視化される
 - でも著者・査読者へのバイアスは？
 - そもそも匿名化はバイアス排除にならない？
 - 可視化して、どうする？ 炎上させるの？

不正行為

- 盗用・遅延
- 詐称査読・結果操作
 - いずれもオープンではやりにくい
- 別の不正は起こりうる？
 - オープン参加で結果を操作
 - それ以外はとりあえず思いつかない

オープン査読の効果

- 透明性向上により不正は減るかも
- 明白な不正行為以外の効果は不明
- 透明性が上がるのは何にせよいいこと？
 - クローズドになっているのも理由がある
 - 研究上の生産的議論ではなく、研究者同士の感情的な衝突・係争を招かないか？

引用・参考文献

- 1) 佐藤翔. オープン査読の動向：背景、範囲、その是非. カレントアウェアネス. 2021, (348), CA2001, p. 20-25
- 2) Ross-Hellauer, T. What is open peer review? A systematic review [version 2; peer review: 4 approved]. F1000 Research. 2017, 6, 588.
<https://doi.org/10.12688/f1000research.11369.2>, (accessed 2022-02-04).
- 3) Jones, L. et al. "A Standard Taxonomy for Peer Review". <https://osf.io/68rnz/>, (accessed 2022-02-04).
- 4) Wolfram, D. et al. "Open Peer Review: The Current Landscape and Emerging Models". Proceedings of the The 17th International Conference on Scientometrics & Informetrics. Rome, Italy, 2019-09-02/05.
https://trace.tennessee.edu/utk_infosciepubs/60/, (2022-02-04 accesed).

Any question ?

min2fly@slis.doshisha.ac.jp

